

気候変動が私たちの暮らしや社会に様々な影響を与える中で、それに対応するための研究や取組が社会を支えています。

今回は、愛知県の農業の発展に寄与するため、品種改良や新技術の研究開発を行っている農業総合試験場（以下「農総試」という。）に、気候変動への適応に関する取組についてお聞きしました。

Q. 農総試として、気候変動影響への適応を、どのように捉えていますか。

地球温暖化に伴う気温上昇等の気候変動は、避けることができない現実であり、新品種の開発など新しい農業技術の開発等により対応していかなければいけないことと捉えています。

Q. 具体的な取組について、教えてください。

水稻を例に挙げると、高温による品質低下や一部の害虫・病害の増加といった影響が確認されています。生産現場からの要望を収集しながら、気候変動に伴う高温や、発生の様相が変化してきた病害虫といったリスクに対応できる新品種の開発等を進めています。

Q. 近年、水稻のほか、イチジクについても新品種を開発していますが、その開発経緯や特徴について教えてください。

初めに水稻ですが、日本の主食であり、安定した供給が求められています。このため、愛知県経済農業協同組合連合会と共同で、水稻新品種「あいちのこころ(愛知135号)」を開発しました。この品種は、暑さによりデンプンの蓄積が不十分なとき等に発

生する^{しろみじゅくりゅう}白未熟粒が生じにくいことから、玄米の外観品質が優れていることが特徴となっています。

次に、イチジクですが、県の特産物であり、栽培面積(2022年)、産出額(2023年)は共に全国第1位を誇っています。農総試では、イチジクのブランド力を強化するため「愛知イチジク1号」を開発し、本県初のオリジナルイチジク品種として、本年8月に品種登録出願を行いました。高温乾燥や急激な降雨による果実品質への影響が小さく、ロスなく収穫できること、また、皮ごと食べられることが特徴となっています。

Q. 今後の課題や展望をお聞かせください。

近年の記録的な猛暑は、農産物の品質低下や収量減少等をもたらして農業経営に大きな影響を与えています。気候変動に対応した農業を目指し、高温耐性品種の育成と品目に合わせた高温対策技術の開発に取り組んでいきます。



玄米外観品質の比較

愛知イチジク1号

左:「あいちのこころ」

右:「あさひの夢」

※左は右に比べて白未熟粒が少ない。(共に農総試提供)

農業分野においても気候変動への適応が求められる時代にあって、農総試における研究開発等は、今後ますます期待されます。

愛知県気候変動適応センター
(環境調査センター 企画情報部)
電話 052-910-5489 (ダイヤルイン)

愛知県気候変動適応センターだよりのバックナンバーはこちら
<https://www.pref.aichi.jp/site/ailccac/tekiou-dayori.html>

